

手と手をつないで

No.370

やま ぐち ひろ ゆき
山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



障がい者の人権について 考える その1

オリパラ、コロナ禍の中で障がい者は――

今年の夏はオリンピック、パラリンピックで活躍した太宰府市民の道下美里選手などのアスリートの姿に魅了された人も多かったことと思います。その明るさ、パワフルな姿はご本人の努力と周囲の人たちのサポートにより実現できたものでしょう。パラリンピックの報道により、障がい者への理解や共感的な心情が深まった側面もありました。

さて、同じ時期に日本全国で新型コロナウイルス感染が急激に広がりました。これまで感染予防対策が講じられるなかで、障がいをもつ人にとって日常生活上のバリアが新たにできてしまうこともありました。例えば次のようなものがあります。

みんなマスクをつけているので、口の動きが読み取りづらくなった（聴覚障がい者）。飲食店が早く閉まり、においを頼りに道を歩けなくなった（視覚障がい者）。お店では店員さんにサポートを頼みにくくなり、距離をおいてレジにならぶことや釣銭のやりとり

が難しくなった（視覚障がい者）。コロナ感染をめぐる状況を理解することが難しいので、友だちと一緒に出かけられなくなった（知的障がい者）。マスクをつける理由がわからない、マスクをつけられないことで外出を控えるようになった（知的障がい者）。家にもる日が増えて気持ちの安定や生活リズムが崩れ、食欲も落ちた（知的障がい者・精神障がい者）。



市内の子どもたちの差別意識はどこから

昨年度は太宰府市内の小中学校で30件を超える差別事象が報告されています。そのほとんどは「キチガイ」「ガイジ」などの言葉を用いた障がい者（児）差別につながる発言でした。学校では各学年で人権や福祉に関する学習、言葉に関する指導をていねいに積

み上げてきたにもかかわらず、これらの事象が起きる原因はどこから生じているのでしょうか。
子どもたちへの聞き取り調査からみてきたことは、差別的な言動は子どもへの保護者や地域の人の言動、年上の子やサークル指導者などの心ない攻撃的な言葉を聞いて、そのまま使っていることが多いことが分かってきました。

差別のない明るいまちづくりをめざして

このように、障がいをもつ人々の安心・安全な暮らしを奪い生きづらさを作り出している要因には、私たちの人権意識や障がい者への無理解や配慮の不足によるもの、制度や施策がニーズに追いついていないことなど、さまざまなものが考えられます。

太宰府市人権都市宣言・太宰府市部落差別の解消の推進に関する条例でうたわれている、すべての市民が安心して暮らせる差別のない明るいまちづくりを進めていくために、私たちの日常生活や自分の内面を見つめ直してみよう。そして次世代にどのような地域社会や文化を渡していくのか、ともに考えていきましょう。

(次回へ続く)